

『満月に発情中！』

著：柊平ハルモ

ill：明神 翼

気が遠くなる。

いっそ気絶という逃避に逃げこむことができたなら、よかったのかもしれない。事態は、なにも改善されないにせよ。

しかし、そう都合よくはいかず、ひたすら弓緒はベッドの上で身を縮めるしかなかった。

なにも言えない。

言えるはずもない。

ひたすら内緒にしていた特異体質を、こんなかたちで見られてしまうなんて。弓緒の気持ちに連動するかのように、獣のそれになってしまった耳は、へたれてしまっ

ていた。本当に、忌々しい特異体質だ。

「あの一眼鏡、落ちたのこっちに置くよ」

エドガーは世間話の続きのように外れた眼鏡を拾い上げると、サイドチェストの上に置く。

「……これ、何？」

ものも言えず縮こまる弓緒に対し、エドガーはあくまでマイペースだ。どう考えても、異常な姿形になっている弓緒に対し、驚く様子もない。だが、好奇心はあるようだ。

「耳、だよね？」

「ひゃっ」

人間のものではなくなってしまったそれに指先で軽く触れられただけで、弓緒の震えるくちびるからは情けない声が漏れてしまう。

弓緒は奥歯を噛みしめた。

「さ、触らないでください。ただの特異体質です！」

「特異体質って……」

マジマジと、エドガーは弓緒を見つめた。

目をつぶっていても凝(ぎょう)視(し)されているのがわかるほど、強い視線だった。まるで、突き刺さってくるみたいだ。

最悪だ。

どうしてエドガーの前ではみっともなく、醜い姿ばかり晒してしまうのだろうか。なにもかも自分の身から出た錆(さび)だと思うと、この場で消え入りたくなってしまふ。

——いったい、どうしたら……。どうすれば……？

頭の中は真っ白だ。頭がまともに働かず、堂々巡りになりはじめていた。

「大丈夫か？」

体を強張らせる弓緒に気づいているのか、いないのか。彼は、毛並みを確かめるような、熱心な手つきで弓緒の耳を撫(な)ではじめた。

人ではない、オオカミの耳を。ぞわりと、背筋が震えた。

「う……っ」

弓緒はくちびるを噛みしめる。

できることなら、エドガーを突き飛ばしてでも、今すぐこの場から逃げ出したい。でも、もう体が言うことを聞いてくれなくなっている。

弓緒の体は、小刻みに震えている。まさに、熱が上がる寸前の……——いや、すでに熱に浮かされている状態になりつつあった。

——……どうしよう……。

泣きたい。

弓緒は決して涙腺が脆(もろ)いほうではない。でも、今は違う。ひどく感情的に、理性よりも本能に引きずられるような状態になっているのだ。

下肢の状態も、あやうい。

弓緒は、ぎゅっと自分自身を抱きしめる。

このままでは、エドガーに決して誰にも見せてはいけないこの体の秘密を、あますところなく見られてしまいそうだった。

「……どうしたんだ？」

エドガーは、弓緒の奇妙な姿にも慌てたり、逃げたりする様子はなかった。でも、好奇心を刺激されて止まらない子どもみたいに、耳を撫でくり回すことだけはやめてくれない。

小さな子どもに弄(もてあそ)ばれる、子犬になった気分だ。

——くっ……。

弓緒は奥歯を噛みしめる。

触られれば触られるほど、こみあげてくるものがある。抗いがたく、弓緒を衝き動かすものに、負けそうになる。

せめて、エドガーから離れられたら。そう思っても、今この状態では、身じろぎすることさえ危険だった。

ますます、体が落ち着かない。でも、エドガーにはそれを知られなくなかった。俯いたままもぞもぞしていると、耳を撫でていたエドガーの手がふと止まった。

「さっきから、なにかもぞもぞしているけど……。もしかして、こっちも？」

「やめ……っ」

無遠慮に、エドガーが弓緒の腰へと手を伸ばしてくる。たぶん、不自然に膨らんでいる

だろう背中の方に、興味を示したのだ。

冗談じゃない。

そんなところまで、触られたくなかった。

無知ゆえに残酷なその手から逃れようとするが、上手くいかない。

「やめてください……！」

声を張り上げても、エドガーはやめてくれない。弓緒のスラックスは、無遠慮なエドガーの手で引き下げられてしまった。

下着が、いや、もっと見られてはならなかったものが、彼の目の前に晒け出されてしまう。

窮屈すぎるスラックスの中に収まっていたそれが、外にまろび出る。解放感は、弓緒に絶望を与えた。

「あ……っ！」

逃げなくては。

隠さなくては……！

そう思うのに、咄嗟には体が動いてくれなかった。

ただ、ベッドの上で体を丸めるように身を硬くする。そんなことでは自分を守れないと、わかっているのに。

「……ええーっと」

エドガーは、驚(きょう)嘆(たん)の声を漏らした。

「やっぱり、しっぽもあったのか！」

「ひゃっ」

エドガーの指先が、飛び出してしまったものを撫でる。その瞬間、ざっと全身の産(うぶ)毛(げ)が逆立った。弓緒は思わず甲高い声をあげていた。

彼が触れたしっぽは、まぎれもなく弓緒の体の一部だった。人間に昔しっぽがあった名残だといわれている、尾てい骨。そこから、ふさふさとした毛並みのしっぽが生えている。

「すごいな、ふわふわだ」

「さ、触らない……で……くださいっ」

その感触を愉しむように撫でる指先に、背筋がぞくぞくしてしまう。弓緒は、思わず声を上擦らせた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>